

平城宮

平城第381次調査 2005.3.19

東院地区の調査



調査団長：文化財研究所
奈良文化財研究所
平城宮跡発掘調査班



早期時代後半の平城京と宮内区のおおまか

東院とは

平城京の南に張り出す部分を東院地区と呼んでいます。奈良時代後半の文献史料には「東院」や「東宮」に関する記載がしばしば登場します。「東院」は、皇太子あるいは天皇が住む場所であったとともに、さまざまな儀式や管会などがとりおこなわれた場所です。

遺跡を中心とした南院部分は、現在崩壊されているように、瓦葺街道によって苑池、区画施設、建物などの存在がわかっています。しかし、北院部分については、よくわかっていません。「続日本紀」に記載されているような「東院玉座」などの中級建物は、遺跡の北側に存在すると考えられています。



遺跡から見た北院。図説は遺跡を北から

今回の調査成果

今回の調査では、大規模な竪立柱建物¹が、少なくとも4回にわたって建て替えられていることがわかりました。注目すべき点は、竪立という構造の建物が多いことです。竪立とは、柱脚の交点すべてに瓦があるような建物を指します。

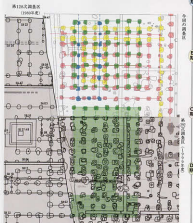
このような建物は、床を高くするための構造と考えられ、²種類や区画に違いがあります。

ここでは、竪立の竪立柱建物¹が、建て替えのたびに規模が大きくなり、最終的には6間×6間という巨大な竪立建物になることがわかりました。

竪立柱建物4の年代別の様子



竪立柱建物4の竪立柱の断面



樓閣宮殿か？

1999年度（第192次）の発掘調査では、前社の厨と后建物は前殿、主殿、後殿からなる一連の樓閣宮殿であると推定しました。柱の大きさなどから全体の建物は、前殿と主殿をつなぐ渡り廊下や階段を伴っています。

こういった構造の宮殿は、平城宮では内裏地区や奈良時代後半に第一次大改築の跡につくられた西宮などで見つかっています。これらの建物は、中国の唐大明宮^{（唐大明宮遺跡）}を模したと考えられています。

今回の調査で見つかった建物は、一連の「樓閣宮殿」の可能性がります。



樓閣宮殿のイメージ

【奈良国立博物館蔵】平城宮跡—02—10



楼閣宮殿跡イから取り戻すの石

校倉か？

前社の建物構造は、高倉する校倉並みの建物にも見ることができます。歴史性建物イからは、これまで各地で見つかった古代の倉庫とみられる遺物をしめて遺構ですが、東高地区の倉庫跡であった可能性もあります。

西側の調査（第128次）では、前とみられる遺物部や井戸が見つかっています。いっばい、東側の一段高くなった広い場所は、東院の中庭部分になると想定しています。

こういった構造や立地条件を考えると、東院の「正倉院」とも推定できるのです。



校倉のイメージ（奈良国立博物館）

【奈良国立博物館蔵】平城宮跡—02—10

東院の中心部分の解明に向けて

今回の調査で見つかった巨大な竪立柱建物が、宮殿の建物であったのか、あるいは高床の倉庫であったのかまだ推定は出来ません。東院の東院中心部分と想定している場所については、まだ一度も発掘調査が行われていません。この点も含めて今後いっそう追究していく必要があると考えています。